

道東海岸線における遺跡分布調査についての経過報告 ～釧路町尻羽岬周辺の踏査報告及び厚岸町暁善寺採集資料紹介～

小田島 賢^{*1}・澤田 恭平^{*2}

In the middle report of the site distribution on the coast of Eastern Hokkaido.

- A survey report of the shiripa cape, Kushiro town and introduction of the collection artifacts gyo-zen temple site, Akkeshi town.-

Ken ODAJIMA^{*1} and Kyohei SAWADA^{*2}

1. 調査に係る経緯

2020(令和2)年11月3日、釧路市埋蔵文化財調査センター主催イベント「黒曜石ナイフ体験」に一人の少年が遺物を携えて訪れた。当時小学生であった角田和海氏は、同年10月中旬に、家族で釧路町尻羽岬へと出かけた際に、未舗装の道路の脇から1点の石器を採集したという。拝借して観察すると、それは確かに黒曜石製の石鏃であった。聞き取りの結果、採集場所は岬へと向かう途中、北側に谷地形をのぞむ開けた場所であることがわかった。

尾幌川以南から厚岸湾の西端部である尻羽岬へと至る一帯は、遺跡分布や当時の土地利用状況など未だ不明である部分が多い。そのため、筆者らは先の尻羽岬における石鏃採集をひとつの契機として、遺跡分布の空白地帯を埋めるべく2021年6月に尻羽岬周辺の表面踏査を行った。また、厚岸湾周辺における情報整理の一端として、釧路市立博物館に収蔵されている厚岸町暁善寺遺跡採集資料の資料化も併せて行った。本稿の目的は、道東海岸線に位置する厚岸湾周辺について、考古学という視点から当時の様相や周辺地域との関連性について考察を行うものである。

執筆作業は、澤田が釧路町尻羽岬について、小田島が厚岸町暁善寺遺跡についてそれぞれ分担して行った。土器の資料化については釧路市立博物館実習生であった渡辺双葉・千原鴻志・中谷百花・藤本尊正らの協力を得た。

2. 釧路町尻羽岬

2-1. 立地と遺跡

釧路川河口部から尻羽岬へと至る海岸線は、急崖を呈した岩石海岸となる地形が随所でみられる。遺跡は概ね海岸台地上に立地しており、釧路市では興津遺跡や桂恋フシココタンチャシ跡、三津浦遺跡といった縄文前期前半を主体とした遺跡が多くみられる。過去の調査事例から、興津遺跡や三津浦遺跡では石囲い炉を有する竪穴住居跡のほか墓壙などの遺構が検出されており、イワシ・アイナメ・タラ・カジキマグロなどの魚類、アシカやオットセイなどの海獣類なども出土している。出土した魚・獣骨の中には、焼けた骨片も相当数含まれており、漁撈を基盤とした集

落・生産活動が展開されていたと考えられている(澤1979)。また、付近には桂恋チャシ跡、桂恋方形チャシ跡などアイヌ文化期のチャシ跡も立地している。桂恋フシココタンチャシ跡では、チャシ頂部平坦面の楕円形ピット内から、頭部を海側に向けたアカウミガメが出土しており、先史時代より続く人と海との関連性が窺える(澤・西1975)。

2-2. 尻羽岬周辺について(第1図)

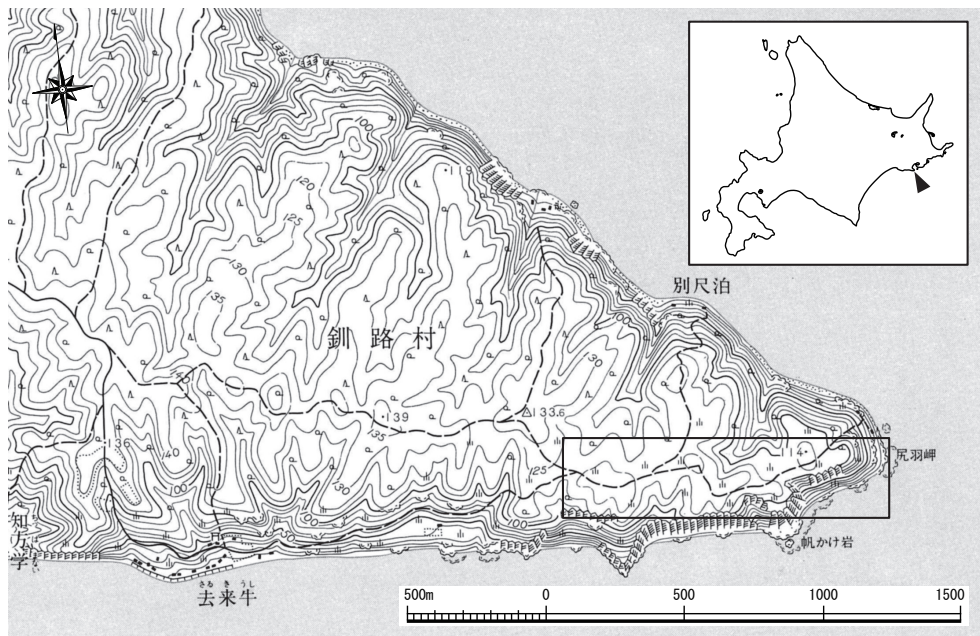
今回踏査を行なった場所は、釧路郡釧路町去来牛から尻羽岬へと至る東西約1kmの範囲である。シリパは、sir-pa シルパ、sir は山、pa は頭となり、アイヌ語で「海中に突き出ている山の頭」の意となる(知里1956)。調査範囲は、標高約100～125mの海岸台地で、南側は海食崖によって断崖となり、海中には岩礁が形成されている。植生は、道東の海岸線にみられるような風衝草原が広がっている。一帯にはエゾミヤコザサやアキタブキが群生し、比較的風の影響を受けない谷地形にはミズナラなどの矮小化した風衝林が点在している。景勝としては、海上に突き出るように帆掛岩がみられ、その頂部には明治後期の建物が発祥とされる鳥居が建てられている。尻羽岬は、文献によると「シリハエト」や「シレハ岬」、「シレハサキ」とも呼ばれており、かつては立火が置かれ、厚岸湾へと至る航路の指標となっていたという。また、明治30年頃の河野常吉・一色藤之助らの報文に「シレバ岬端ハ釧路郡中最モ昆布ノ発生宜シキ地方ニシテ品質亦佳ナリ」という記載があることから、岩礁によって航行危険区域でありながらも良質な昆布漁場であった(釧路町1990)。

2-3. 調査方法と採集遺物(第2・3図)

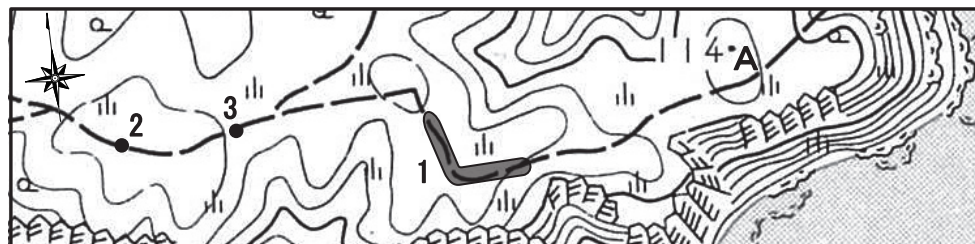
調査方法は、小田島・澤田が未舗装の散策路を中心に地表面が露出した箇所について踏査し、遺物の採集や地形の実地確認を行うというものである。2021年6月21日の合同踏査に加えて、同年4月10日に小田島が、10月27日に澤田がそれぞれ現地踏査を行っている。計3回の調査結果から、縄文晩期から縄文の土器片1点、石鏃2点、フレーク1点を採集した。採集箇所は可能な限り地図上にその地点を示した。調

*1 厚岸町海事記念館 Akkeshi Maritime Museum

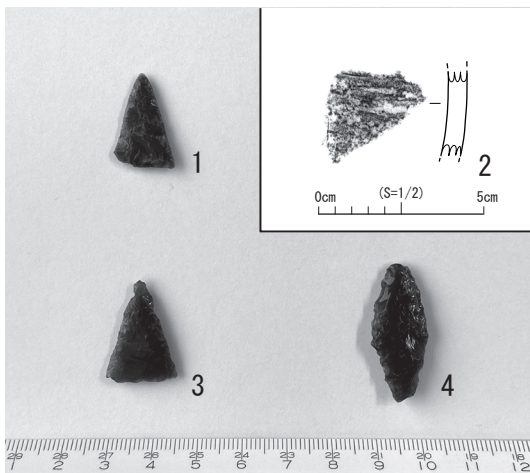
*2 釧路市立博物館 Kushiro City Museum



第1図 鉦路町尻羽岬周辺地図（国土地理院 1：25,000 地形図「尻羽岬」）



第2図. 拡大範囲及び遺物採集地点



第3図. 鉦路町尻羽岬採集遺物

査範囲は緩やかに起伏しており、標高が比較的高くなるA地点から傾斜する岬の端部にかけては、時期不明の段ずれや溝状の跡といった地形変化の痕跡も確認された。

第3図1・3は無茎石鏃、4は有茎石鏃で、1は角田氏が採集したものである。すべて黒曜石製である。掲載しなかったものの、1の採集範囲内から黒曜石のフレイクも1点みつかっている。内山氏が設定した石器編年に則って分類すると、1・3が平基式、4が凸基

Ⅱ式となる（内山1998）。2は深鉢の胴部破片である。外面の磨滅が激しく、文様については判然としないが、残存する圧痕から単節RLの縄線文が複数条施文されていたのであろう。今回採集した資料については、土器や石器の特徴から縄文晩期から続縄文期前半のものと考えられる。

3. 厚岸町尾幌地区暁善寺遺跡採集資料（資料紹介）

3-1. 資料の概要

厚岸町の西方に位置する尾幌地区は、蛇行する尾幌川周辺の平地部と、盆地状に囲んでいる山林丘状地帯からなる。今回報告する暁善寺は1899年に創建され、佐藤暁善が尾幌説教所を開いたことにより始まった寺院である。尾幌地区のオポロとは、アイヌ語で「オ・ポロ・ベツ」を由来とし、川尻の大きな川を意味する。

厚岸町暁善寺遺跡（北海道教育委員会登録番号M-03-08）は、厚岸町尾幌455・459・462番地に所在し、尾幌川に注ぐ小河川の左岸の微高地に立地している。今回紹介する資料は、1967年に山崎正二氏によって暁善寺の境内西側及び隣接する放牧地から表採され、当時鉦路市郷土館に勤めていた澤四郎氏の元に寄贈されたものである。

3-2. 土器（第4図）

暁善寺遺跡から表採された土器は110点であり、

総重量は994gである。時期は縄文前期からトビニタイ期までの幅広い時期が見受けられる。

1は縄文前期の土器で単節RLの斜行縄文が施されている。2～10は続縄文期初頭～前半の土器である。2・4は無文の口縁部であり、4はやや外反する。3は口縁部で、頂部に刻みをもち、横走する単節RL縄文が施されている。5は、単節RL斜行縄文を地文とし、同じ原体による縄端圧痕が施されている。6は3条にわたり0段のR原体による縄線文が施されている。7・8は上部に単節LR斜行縄文が施され、下部に無文帯をつくる、所謂恵山式の文様帯意識を残した地方型であると考えられる。9は下田ノ沢式土器でU字状に垂下する貼付文が施される。10・11は後北C2・D式土器である。10は三角形の列点文が施され、11は沈線によるモチーフを描くものと考えられる。12は擦文土器である。13はトビニタイ式土器で、ソーメン文が施され、内面は緻密なミガキが施されている。

3-3. 石器

石器の総数は50点であり、総重量は175.9gである。全て黒曜石製で、器種は石槍・石錐・搔器・削器がみられる。うちわけは、石槍・石錐・搔器がそれぞれ1点、削器が8点である。

4. まとめと展望

今回の調査によって採集された資料は、個体数が少ないものの、縄文晩期から続縄文期のものと捉えることができる。追加資料が待たれるところではあるが、これらの時期における尻羽岬周辺の土地利用は、興津遺跡や桂恋フシココタンチャシ跡などに類する状況であったことが想定される。また、A地点付近で時期不明の地形変化を確認することができた。尻羽岬については文献資料にも乏しく、現段階での詳細は不明ではあるが、先史時代以降における土地利用の可能性も考慮しつつ、今後とも調査を行っていきたい。

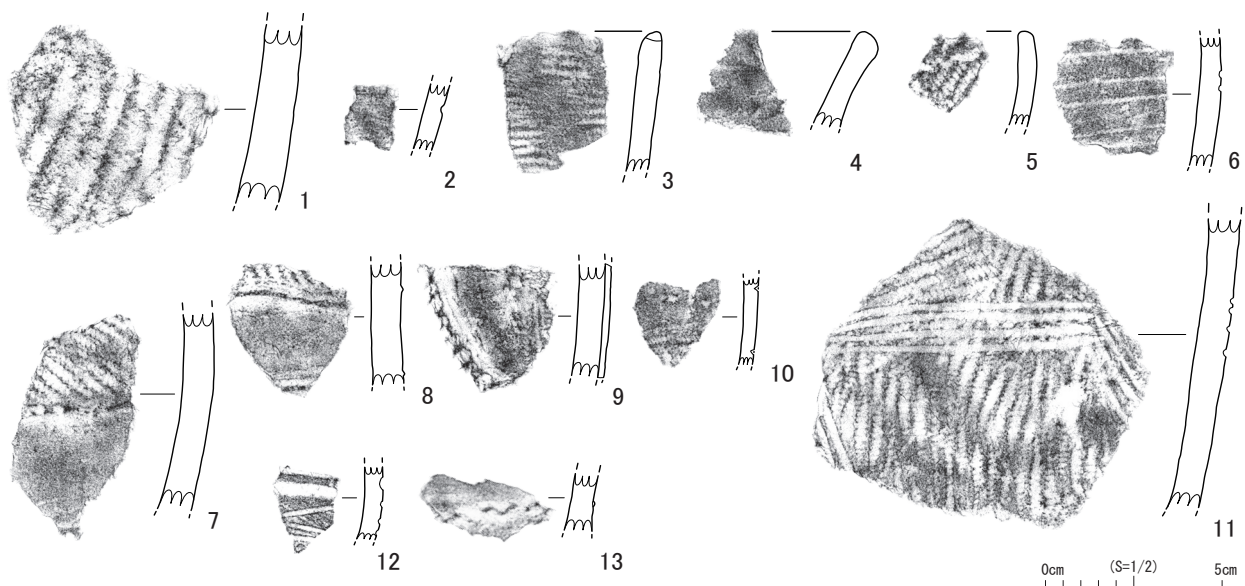
資料紹介として厚岸町尾幌地区暁善寺から採集さ

れた遺物について資料化も併せて行った。採集資料は、他の時期のものも散見されるが、続縄文期初頭から前半期のもものが中心である。釧路地方のこの時期の土器群は、フシココタン下層式→興津式→下田ノ沢式として変遷するといわれている。しかし、これらは型式として設定されているものの、内容が曖昧なものも多く、層位的検討もなされていないことから、果たして上記のような変遷は正しいものであるかは甚だ疑問である。今回のような未報告の資料整理を継続し、型式をあらためて再設定することが必要であると考え

る。また、尾幌地区には、暁善寺遺跡を除いて現在までに登載された埋蔵文化財包蔵地は皆無であることに加え、当遺跡から西側は釧路町の遺跡を含めても半径10km以内で遺跡が見つかっていない。そのため、当地区においては現在のところ先史文化における調査及び研究が進んでいないというのが現状である。しかし、尾幌地区ではかつて農作業等で土地を耕作していた際に、遺物が出土したという話もよく耳にすることから、先史時代人による営みが全く行われていなかったとは言えない。そのため、今後も継続して周辺の踏査や収集された遺物の研究を行っていくことが必要であろう。

厚岸湾及び厚岸湖周辺の自然や人の様相については、釧路市立郷土博物館創立40周年を記念して実施された道東海岸線調査に詳しい(澤ほか1984)。この総合調査は、約400kmにも及ぶ道東の海岸線を多角的な視点から調査することで、海と人との関連性を追求した画期的な調査であった。しかし一方で、非常に広域な調査であったため、人手や時間といった様々な制約があったという。

今回、道東海岸線総合調査の継続調査として尻羽岬の表面踏査に着手した。成果としてはわずかであったものの、遺跡分布の空白地帯であった尻羽岬周辺について、先史時代における人々の痕跡を窺うことができた。今後は、調査対象地域を広げていくことで、



第4図. 厚岸町暁善寺採集土器

より俯瞰的視点からの海岸線研究を行っていききたい。

今回、諸般の都合で石器については簡単な特徴を述べるのみとなってしまった。稿を改め今後の海岸線調査と併せて紹介したい。

謝辞

元釧路短期大学教授の佐藤宥紹氏には、暁善寺遺跡の資料が寄贈された経緯について、詳細に説明をいただいた。また、資料の持ち込みや今回の調査へと至るきっかけをくださった角田和海氏とご家族の方にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

厚岸町 .2021. 新厚岸町史 通史編第二巻 . 厚岸町 .
内山真澄 .1998. 続縄文期における石鏃の変化 . 時の絆 ,pp.167-179. 北海道図書企画 , 札幌 .
尾幌開基・開校百年記念事業協賛会 .1999. 尾幌開基・

開校百年記念 百年史 . 尾幌開基・開校百年記念事業協賛会 , 釧路市 .

釧路市立郷土博物館 .1975. 釧路市桂恋フシココタンチャシ調査報告 . 釧路市教育委員会 , 釧路市 .

釧路市立郷土博物館 .1976. 釧路市三津浦遺跡発掘報告 . 釧路市教育委員会 , 釧路市 .

釧路市埋蔵文化財調査センター .1979. 釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ . 釧路市教育委員会 , 釧路市 .

釧路市立博物館 .1984. 道東海岸線総合調査報告書 . 釧路市教育委員会 , 釧路市 .

釧路町史編集委員 .1990. 釧路町史 . 釧路町役場 , 釧路町 .

下中直人 .2003. 北海道の地名 . 日本歴史地名大系第一巻 . 平凡社 , 東京 .

知里真志保 .1956. 地名アイヌ語小辞典 . 北海道出版企画センター , 札幌 .



調査範囲遠景 (西から)



表面踏査風景 (西から)



土器採取付近 (東から)



帆掛岩と鳥居 (北西から)



A地点付近から大黒島を望む (西から)



地形確認調査風景 (東から)

写真 尻羽岬周辺調査